

小笠原島紀事 全

三十三

					和書門類
			三七四		
	一	二			
三	三				
冊	架	函	號		

庫文閣内			
三十三	三七四		和書
冊	架	號	類

内閣文庫	
番號和	3774
冊數	33 (33)
函號	173 179



Kodak Gray Scale

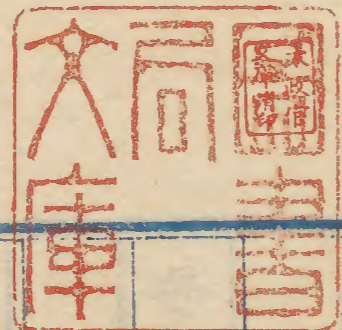
A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19



Kodak, 2007 TM: Kodak



月
務
省



小笠原島紀事卷之三十一

目錄

○彼理日本紀行 無人島ノ部

明治十五年謄寫

内務省

内務省

彼理日本紀行卷之十無人島部

瀬脇壽人

内田又五郎

無人島。日本海中に在て。其地形殆ど北南に向
て流れ。北緯二十六度三十分。二十七度四十五
分の間を位す。此島の中心を通ずる線は。東経百
四十二度十五分を在り。本島ハ一千八百二十七
年。英國の加比丹^ゴト^チエ^ー氏。其測量家を以て
測らしめ。漫り其説を以て。正説とす。既ニ名義
ある事を知らず。彼等ヲ始めて。檢出せし如く唱

へて。本島ニ名を命じ。其北ニ在る者を「ハリ」群島と稱し。中央ニ在る三島の一を「ベール」島。其二を「ブツクランド」島。其三を「スダプレート」島と稱し。又其南ニ在る者を「バイレー」島と稱す。此南の「バイレー」島ハ。鯨獵船の船頭「コッフィン」氏。一千八百二十三年始めて本島ニ到着して其地位を亞國ニ報告し。其名を讓て「コッフィン」港と名けたり。然るニ其後本島ニ何の名稱も無りけれハ。今予天文家の碩學。フランシス、バイネー」氏の姓を取て。「バイレー」港と名けしあり。又「ペール」島の大港ニハ加比丹

「ビ」チエー」氏。既ニ名を命じて「ロイド」港と以へり。本島ハ一千六百年間ヨリ普く世人の知る所なるニ。一千八百二十七年ニ至り。加比丹「ビ」チエー」船頭「コッフィン」氏。偶島中ニ到着して。自ら始めて檢出せし地ニ。諸所ニ地名を命せしハ。實ニ面目を失ふニ似たり。ケムヘル」氏の説ニ。遙ニ前代。一千六百七十五年。日本人既ニ本島ある事を知り。之ニ名けて「ブナ」シマといへり。フナシマハ人ふき島の義あり。又同氏の説ニ據れハ。一千六百七十五年日本船一隻大風の日ふ當り八丈島より纜

を解き出帆せし風力為り流されて偶々大なる
一島を登明せり此島八大島より東方に當り日
本里数にて三百里を隔つといへり儲加比丹
一子一船頭ゴフイン等島中より見しに更
人跡なければ共氣候甚だ溫和にして地質肥腴又
清水を生し多く草木繁茂し殊に亞カ樹（亜カ樹は酒
を造る樹多し是を以て考れば本に暖國に生す
る樹なれば本島の地位日本より正東に當らば
して多く其南に當りて察せらるる日本人も亦本
島を無人の島嶼と以然れ共其海濱に海魚蟹類

の多き事実を量るべからば其大なるハ四
ビ一ト乃至六ビ一トの者ありと以へり彼理氏
今ケムフル氏の書記する所を左に擧るる日本人
の書記する所を合せ見ると其土地形勢実
符節を合せたるの如し

左の抄譯を載る所の亞カ樹ハ「ベール島」に在り

カラスパロツ（人名）氏反譯「サン、ゴク、ツウラシ、ト、シ

ツ抄説（カラスパロツの三國通覽國説より。反譯

意たる説の

本島の本名ハ「スガサワラ」ニ（小笠原島）と共通

島名

例世人之を。モン、ニン、シマと稱す。漢名ウ、ジン、ト、といふ。共小人かき島の義あり。今予此名を取て以て此書に載す。ガガサ、ワラ、シマといふ名稱ハ本島に始めて渡來し。島中の圖を作りし人の名より取る。即ち二百年前。南亞米利加の一部を「マゲルラン」といふ人檢出して。マガラニア」と各けし同例あり。

無人島ハ伊豆國の南東海中。日本里數二百七十里に在り。伊豆の下田より。「ミヤケシマ」三宅島。また十三里。「ミヤケシマ」より「シマシマ」新島。また

七里。「シマシマ」より。「ミコウラ」まで五里。「ミコウラ」より。八丈まで百八十里。其最南部に至れば。二百里に及ぶといへり。

無人島に稱する群島ハ。北緯二十七度に在り。島中の氣候甚と温和にして。高山の際に。數十の溪谷を生じ。小流滾々として漲り。自然に肥腴の地質あり。是故に蠶豆。小麥。粟。其外諸種の穀類。甘蔗を生じ。又「ナンキン」と稱する木。即ち巴豆樹。及び蠟を製する木を生ず。漁獵極めて多し。以て産業と為すべし。

島中ニ草木森々として繁茂すれ共。四足の獸類ハ、甚しき。木ニハ頗る巨大にして一人の手にて抱き得ざる者あり。又其高さ支那の三十尋。即ち西洋の二百四十ヒトに至る者少からず。其木質堅牢にして美麗あり。此外シラ、ロ、ツ、イン、グ、リ、ラ蓋し漢名チ、マ、ロ、プ、ス、エ、キ、セ、ル、サ、ニ、稱する高木。椰子、アレ、カ、パ、ル、ム樹名支那にてヒョリアン、チニ唱ふる實を生ずる木。カチラウ樹名紫檀。ト、モ漢名樟腦。ヒ、グ、ス、ラ、ス、マ、ウ、ン、テ、ト、ン山中無花菓樹の各地

上ニ横より生ずる。長春藤の葉に似る一種の葉ある高き木。肉荳蔻。桑樹等の類あり。草類ハ。撒免沙巴里兒刺。即ち山飯來。東桂。ア、ジ、ラ、ン、キ、ワ蓋し漢名ニ稱する。藥草等あり。鳥類ハ。ハ、ロ、キ、ー、ツ鳥名の數種。鷓鴣。鷓鴣。白鷓。類似する一種の鳥にて。体格の長き海鳥居住す。此鳥類。皆家畜の如く徒手にて捕へ得る。本島ニ生ずる礦山物の主宰ふる物ハ明礬。綠礬。各色の石類。及び化石の種類あり。海中ニ鯨

魚多く。又大なる蜷^{ガリ}蛤^{ガニ}。大貝及ひ世々海中の胆
と稱する。イシニの類あり且海中より産する
物品。極て多く。実ニ枚擧するに遑あらん。

日本延寶三年西洋紀元一千六百七十五年。長
崎の住人。シマエ、サエモン。門島屋左衛門ヒソ、サエ
モン。未シマエ、タイロ、サエモン。門島屋太郎左衛
門の三人。天文地理兩學に達したる者ふむハ。江
戸小網町に住する船工棟梁。ハトベと以ふ者
は誘引せられ。支那の精功ある船工を造り多
る。一大船に乘り船中の人負三十名より。伊豆

國下田に到り。本地の海軍局より路票^{ワザライチカク}を得て。

四月五日。下田港を發し。八丈島に碇泊せり。夫
より又南東に向て奔り。八十箇の群島を檢出
す是に於て本島の密圖を寫し。加ふるに島中
の氣候。位置。及び産物を以てし。今年六月二十
日下田に返着し。圖説を上梓して。之を公行せ
り。

右三人の上梓しある図説は。ミコウラと。八丈
の間は在る黒瀬河と稱する急流ある事を載
せりハ。實に怪むべし。此黒瀬河の幅ハ。二十マ

即ち日本里数にて半里餘。其長さハ大約一
 百里。東より西に向て峻急ニ流る。東より西
 への誤り。三国通覽を著せし人此急潮。冬季春
 季よりも。夏季秋季に於て最も強し。シマエ屋島
 等の無人島に到るや閏四月初旬にして。其飯
 るや六月下旬ふれハ潮勢頗る緩ふる故に
 此危き急流を知らざるに乎実ニ怪むべきの
 至りあり
 無人諸島八十箇の内ニ於て。其最も大なるハ。
 周囲十五里ふれハ壹岐より少し小あり。又之

又次て大なるハ。其周囲十里なるを以て。大約
 天草島の大きふり。此二島の外ハ八島あり。其
 周囲二里乃至六七里に及ぶ。此十島ハ平地あ
 りて。人民居住すべく。又能く穀類を生す島内
 氣候煦温にして耕作に宜し是故に他洲の人
 亦ても到り住すべし。鳴中諸所ニ。各種の貴き
 産物あり右十島の外。叢雨たる七十箇の小島
 ハ岩石幾々こして峙立し。一物も生し難き地
 あり。
 嘗て本島に罪人を送り。一地を開墾して耕作

セリゆゑ事あり罪人等群居して村落を為し。帝國日本諸州に生ずる物品と。同様の物を産せり何人よても本島より一年より一度往來し得へけれハ。交易忽ち盛ふるに至り。其裨益ハ莫大ふるへし此形勢を以て。餘ハ皆推知すへし

日本安永年間即ち西洋一千七百七十一年より。一千七百八十年間。予官命を受けて。肥前國に赴き獨乙人。アイルランド、ウェルレ、へし止氏と。相交りし時。同氏予より日本の南東に當り。二百里

の海中に於て。著作家某氏「グリスチ、エーランド」
 止と稱する島嶼の事を唱へ圖説を示せり「グリスチ」ハ荒蕪の義「エーランド」ハ島の義といへり今氏の説ハ本島未だ人民居住せざれば。諸般の草木蝕く繁生すれハ。將來人民を移し居住せしむへし。古の如く地質肥腴の島あればハ。日本より遠路を厭えん。植民せハ。必ず裨益あるへし。遙々蕪茫として隔りたる。獨乙國よる植民してハ。其利極て少るるへしと云へり

毒人按ずる。此一節にて予といへるハ。三國通覽圖説を著せし人自らいへるからん

今此註文の末に無人島一件にて。予ら獨乙人
より、聞き。肺肝に命すへき數十言を載せ以て
後人又示すのみ

右本條に述る所の大蟹といへるハ。ゲンヘル氏
のいへる。大なる緑色の亀を。誤り認えて。大蟹と
いひしからん。

右の註文に述る如く。日本人一千六百七十五年
に當て。本島を檢出すといひしなり。一説に尚其以
前。日本人本島に渡來すともいへり。英人ハ本島
檢出の事。於て更に興ふる所あり。彼理氏ハ是

より先一千六百六十二年四十噸の日本船其海
濱より暴風の為に流され偶に「イド」港に漂着し
て始て本島を檢出し本年冬季ハ本港に在留し
て春暖を迎へ日本に皈りしに亞人「サウラ」氏よ
り聞り此時船中に些少の乾魚の外他物なきを
以て島中の土人其貯ふる所の食料を日本人に
恵み興へしに或人其後八年を経て一千六百十
七年に當り佛蘭西船或る日無人島中の一島に
「フレスト」を出帆せしに遙に離れて海岸に爛
々として火光を放ちたるを見出しければ小船

を送り検査せし免し日本船破却して船中の
 人負大半溺死し僅に五人餘命を繋ぎ實に憫然
 の形勢ありけれハ佛船の將大に哀愍の心を生
 し彼五人を船中より乗せコイド港に携へ行き遂
 之を日本に送致すといへり。此時我々ジョース
 コイハンナより出たる。士官の一船も。偶にスツア
 レトに來着して。右の船の破却せし痕跡を見
 しといへり。亦以て證とすべし。士官等。島中の一
 小港に上陸し見し銅板銅釘など尚存在せり。
 此餘物。及び其事跡を以て察するに。右の船ハ日

本船ある事心せり。又板具など。未だ腐敗に至ら
 ず挫折にも至らざれハ。久しく年月を経る事
 も證とするに足れといへり。
 上の擧る鯨獵船の船頭「ゴッフィン」氏ハ。其本國を載
 ざれハ。何れの國の人なるや。知るべからずと雖。
 其姓字の連綴を以て考ふるに恐くハ亞國人な
 らん若し亞國人なる時ハ。ナンチュケットより出船
 して。本島に到り。其一港に彼ら姓字を譲て。ゴッフ
 イン港と名けしあるべし。然るに「ビィチエ」氏ハ。
 本島に到りたまはとも。大に謙遜して其名を命せ

す。バイレ¹島といひ¹こそ。此バイレ¹島ハ。土
 人南島。ニ稱¹無人島の一部ニ¹。コイド¹港の南
 大約十二里¹洋の海中ニ在¹。加比丹¹コ¹氏。
 英國の測量船。フロソ¹船を指揮¹て本島ニ到
 着¹。之を英國王の屬地ニ¹。英國の名稱を唱
 へ志¹。實¹ニ一千八百二十七年¹。然¹るニ
 土人等英國の管下¹なる事を肯¹。英國の加比
 丹¹。コ¹氏¹命¹たる名稱を唱¹ふる者¹。之
 之を譬¹ふる¹。コ¹氏¹。北部群島中の二島を
 ブック¹ランド¹。スタ¹プレート¹。ニ¹名¹け¹る¹。土人等。此

名稱を唱¹へず。ゴ¹島¹。ホグ¹島¹。ニ稱¹せ¹類¹なり。
 英國人の無人島¹ニ未¹着¹して。其屬地¹ニ¹。年月
 ハ。銅板¹ニ彫¹刺¹。釘¹ニ¹樹¹幹¹。固¹定¹。あり¹つれ
 共。久¹し¹。ら¹ず¹。て消滅¹せ¹。是故¹ニ英國¹より。無
 人島¹近海¹。航海¹せ¹者¹。命¹島¹中¹。上陸¹。近
 隣¹の岡上¹。登¹り。英國の國旗¹を翻¹。以¹て英國の
 屬島¹たる事を表¹せ¹。む他人¹より之を見¹れ¹。英
 船の來着¹せ¹。事を報¹ずる者¹の如¹。土人¹ハ島中
 の人民¹。ふて。百事¹。分¹。敢¹て他の管轄¹を受
 る事を要¹せ¹。て。政府¹を設¹る事を欲¹せ¹。

英國の加比丹^ビト^ケ氏。本島に到着して明年魯國の海軍加比丹^ロト^ケ氏到着して英國の如く屬國とせし式礼を行ひ。又其私有とせり。右の如く諸説あれは本島を檢出せしハ。日本人ある事。實は明けし。恐くハ日本人。其初殖民して直ち又飯國とせしからん。日本人在住の時。先ツ伊斯巴尼亞船。葡萄牙船。獨り船渡来して。無人島人と通親し其後亞人。英人。魯人來船せしあるべし。伊斯巴尼亞よりハ。教法の長官。來りし事に見し。本島を法語にて稱譽せし事あり。土人某氏

いへるハ予始め本島に來着せし時ハ。一枚の板ありて。本島に渡來せしハ魯人を以て濫觴とす。と書し者ありといへり歐洲よりハ。未タ本島殖民する事を謀りたる者を聞す

一千八百三十年に至り亞人歐洲人等。本國の男女數人を携て。サンドウイ^ズ島より出帆し無人島に渡來せり。此行の先登ハ五名よりして。亞人二名。ナサニール^ルサウ^リ。アルジ^ン。ビ^ン。チャピ^ン。兩氏。英人一名。リ^{チャ}ルド^ミルド^{チャ}ム^プ氏。丁^抹人一名。カ^テラ^マザ^ラ氏。レス^ショ^ンリ^ン氏。セ^ノエ^ノ人一名。カ^テラ^マザ^ラ氏

ふり。彼理う本島に未着せし時。尚残留せしハ。亞
人ナサニールサウリ氏の。ミルドチャムプ氏も。
尚存命ふまじ。テドロ子といへる群島の一島。ギ
アムに轉住すといへり。エ人マガラ氏ハ。既
に物故しけれハ。サウリ氏尚壯年にして美人ふ
る其寡婦を娶り。一子を産多り。サウリ氏自ら些
少の田圃を耕せし。頗る利ありといふ。又サウ
リ氏自ら勤めて番薯を作り。甘蔗を蒸餾して。糖
水酒を製し本島に往來する。鯨漁船に鬻ぎ。一時
に數千の串を貯蓄するに至れり。其後三四年を

経て。亜船一艘未着し。船中ニサウリ氏親しき
旧老友諛諂面諛の悪漢等を携へ來れり。サウリ
氏ハ。斯くとも知らず。彼の旧老友と相親み。貯へ
多る數千の串を出し。老友と共に之を地中に埋
免しり。悪漢等此事を知りけれハ。數月の間語を
卑ふし。身を譲り。益サウリ氏に諂諛し。遂に其數
千の串を奪ひ。且婦人を掠免。其家具の物品。及び
旅記を盗み。悉く之を賣却し本島を遁れ去り。
り。其後悪漢等ホノルルにて捕縛せらるけれハ。
婦人身命を抛り。一言を發し云へり。我再

以無人島に飯るの面目ふし。唯、串を地中より掘り出せしや否。之を探索せんを欲するのミこ。無人島の地形ハ頗る高く。岩石巍々として峙立し。噴火山た、まし事察然た、ま本島の水際ハ。珊瑚の小片散在し。水邊より漸く。丘陵の斜地ハ登れハ。回岐線地方ハ生する青草滿地ハ叢生せり。山上及以諸所ハ散在する岩石ハ。前世界の激動ハ由て。千形萬態を顯し。之を眺望すれハ。城郭の如きあり。塔の如きあり。又巨大ハして醜体なる猛獸ハ似多るもあり。島中岩石の間ハ。孔の如く

門の如き通路あり。其形恰も石工の鑿を以て。穿ちたるハ異ふらす。蓋し此岩石ハ其初未と流動物た、まし時、偶、雨候ハて。其雨水山上より。急ハ海面ハ向て流れ平面を為して。溝渠を生し噴火の衰換ハ由て。斯く異形を顯せし事分明あり。此岩石の異形ふるハ。數百年の星霜を経て。雨水ハ洗濯せらるゝと。虫。依然として更ハ。磨滅せし所なく。頭を回らし之を望見ハ。某氏山上ハ登らんとして。新ハ石工ハ命シ。堅石を切り。石壇を設けし乎と疑えらる。又、ロイド港内。南岡に唱ふる所ハ於て

溶化石の中を貫通する奇異天然なる洞門あり
 て南岡、より北岡と達す。洞門の入口ハ其幅十五
 ヒート其高さ三十ヒートより五十五ヒートと登
 ハ其高さ。急は四十ヒートより五十五ヒートと登
 リ。建築家の穹隆形を作る者の如く。且絶頂ハ要
 石ありて。恰も人造の髣髴あり且此洞門ハ海水
 流通して。小舟往來すへし尚許多の洞門あり。其
 一ハ長さ五十ヤルトより。本港より高岡と通
 すへし土人常ニ獨木舟にて往來せり。
 本島の土質ハ礦物ニ各種の緑石ニ紛混し。又圓

柱形の溶化石を含み加之ホルンフレンテの礦物名

白瑪瑙あり本島ハ往時噴火山たる跡證あり。往
 昔ペール島子。居住せし者の以へるハ。地震地たるの明證
 子を方今亦至り。毎年地上。兩三動する事ありこ
 ロイド港ハ。ペール島の中央よりして。其西部不在り。
 本港ハ海中頗る深けれ共。船舶の出入ニ容易よりて。
 碇泊するハ風波を防ぎ。甚々安全の地あり碇を投すれ
 ハ。十八尋より。二十二尋と達す。本港ハペーネー氏の海
 図にて。北緯二十七度五分と三十五秒。東經百四十二度十一分と
 三十秒と在り。然れ共シニスコイハン船の

船將り測りし所にて東経百四十二度十六分
に。三十秒ふるを以て。ピルチェル氏測りしより
五里東に在り蓋しピルチェル氏の謬誤なり。本未
良港と稱するハ風ある時ニ當て。港内の船舶。自
在に動揺し。風下ニ向ふ程の深きニ廣きニあり
て。入港ニ便ふるをいふ。ピルチェル氏ハ本港の方
向を定めたる説ハ。實ニ正説なるを以て彼理氏
の説ニ合せて。之を附録ニ載す。樹木ハ未着する
船舶。屢ニ切取り積み去るニ雖。甚だ多量なり。水も
亦十分なり。流水を汲む。其性甚し良し。居宅を建

る木材ハハ乏き所あり。若し多人数渡來して。家
屋を建築せハ。忽ち用以尽すべし。本島ニ生する
樹木の類ハ。ヤマナ詳未。野生桑の兩種ニす。ヤマ
ナナと稱する木ハ。デラシル。メキシコのリット、ウー
ド赤き木の義の類ニて能く永久ニ堪る木なり
ロイド港。及び其近海ハ。良種の魚類極えて多量
あり共。珊瑚頗る多くして。海中ニ列を為し大網
を引く事あたは。是故ニ鈎。或ハ小網を以て之
捕る漁獵の良地ハ。海濱より珊瑚の列を為した
る地部ニ近接したる深き海中にて。テンハリーソ

ハ、ホー^ルの十尋^坑と稱する所ニ在リ。魚の種類ハ甚た少く嘗て「シユスコイハン」船にて。大網を投せしは僅に五種を得しのみ即ち鰯一種鱸二種カ^ル詳^未一種尋常の鱧一種なり。沙魚甚く多し其小ふる者ハ珊瑚石の間ニ遊泳し。犬来りて之を捕へ。砂上ニ揚る事あり。

又本島の海中ニ緑色の亀多し。渡来の船舶多く之を取て食料とす。又刺^{ゴリ}蛤^カ多し。螺^ニ類^ル極て多し其共珍奇ふるをあらす。ヤ^マシガ^スと稱する貝ハ。食料ニ供ふべし。然れ共硬くして消化し難し。其

他は食ふべき貝類を見ず蟹の種類甚た多し。て數ふるに違あらず。就中陸蟹多し。其大小形状色澤各同一ならず。其最も多きは世に海賊。又宿^ヤ借^カと稱する者ニ此海賊ハ。其脊ニ或ハ白色。或ハ黑色。或ハ大或ハ小く或ハ丸く或ハ長く。大小形状。色沢。悉く相同しからず。貝殻の捨てたるを見て之を奪び以て其住所とす。本島の住居なり。是故に海賊^{ウミヌスビト}又宿借の名義あり。

海陸の鳥類。甚く少く實は怪むべし陸上ニ住する鳥類。僅に四五種に過ぎず。其最も大なるハ島鳩

の兩種よりて。其他ハ皆小鷓ツルあり又海中の鳥類
 ハ鷓ツルと他の一兩種の海鳥のみ本島の近海に至
 れハ頗る巨大よりて。其翼ハネニ光沢ある海鳥を見
 るといへり
 四足獸ハ洋麋シカ豚イノシシ山羊ヒツジ且猫ネコ犬イヌ多し猫ネコと犬イヌとハ其
 初其主ありはれ共。今ハ之を失ハ原野山林ノに住
 つけられハ。土人大ニに賤んて。野獸ノを稱ス。其飼ふ所
 の犬を使役し。以て之を捕ふ。往時ノ。スト多クプレトニ
 島。及び自餘の島嶼ニ未往せし人民山羊トと豚ト
 を植クより方今ニ至り。スト多クプレトニの山羊ト。異常

より多く播殖せり。彼理氏ハベル島北部の海岸
 には牛二頭。牡牛二頭を残し又北島ニ上海産の
 圓尾羊五頭と山羊六頭を止む。是れ後日播殖せ
 し免ノんニ為ルあり。
 無人島中にて。居人の多きハ。ベル島ハれ共。彼
 理氏の到りし時ハ。僅ク三十壹人ニ過す。就中
 兼國人種三四人。英人三四人。葡萄牙人一人。其他
 ハサントウノ人。及び本島ニて出産したる兎輩
 あり。土人各ニ一地を耕し番薯サツマイモ玉蜀黍トウモロコシ冬瓜ナマズキ葱ネギ夕ト巴
 未及ル諸種の菓実を植ク。其最も多きハ。西瓜ハ。バ

ナナス未詳鳳梨は此地上の産物を豕。雞。鷓。杯。と
 共ニ貯。一置き入港したる鯨獵船ヲ鬻く物品ニ
 ず。スコイハンナ船。本港ニ四五日碇泊せし間
 於テ。亞國の鯨獵船二艘。英國の鯨獵船一艘入
 港して小舟を浮へ土人の許ニ到り。食料を求め
 出港せし者あり。土人焼酒製の飲料を好むを以
 て本ト船中ニ齎し來る焼酒を右の食料ニを交
 易せり。土人筋骨を厭えされハ。尚廣く耕し得
 べし。方今土人の耕作する地ハ。諸所ニ散在し。多く
 ハ海濱の低くして。海水ニ接する所ニあり。又海

岸の平地ニも在り。其低き所を山上より新ふる
 溪水流れ未りて。作物を培養せり。其開墾したる
 地面島中を總計して僅ニ百五十アクレス一ア
 ハ我々ナハニ過ず。地質ハ甚々肥腴ニして。本島
 歩余ナリハニ同緯度の「テイウ」カナリア兩島ニ異ふる事
 あり。本島ハ葡萄を作らふ適地にして。又小麦。煙
 草。甘蔗。及び自餘の草類を作らふ妙あり。土人既
 其自用の甘蔗煙草を植る事實ニ多量あり
 べし。島ニ居住する人民ハ洪福にして。不足ふ
 らるべし。歐洲より來往せし者ハ。其座右ニ心思

を慰免開化を進むるの具を備へ以て其意も適
す居人其室内を數局に分ち支那製の畳を敷き
其壁は畫幅を掛け椅子一兩脚を并へ食盤を
出し又藍物は區分したる物品及び各色の石版
を備へ以て自己の鬱閉を破るのみも非ず奢侈
も属する物をも備へ眼目を樂まむるの一具
とせり。

本島は未住するサンドウヰス人航海家交易家
の親しく目撃する如く其本國は齊しく棕櫚を
集めて屋上を覆ひたるを以て恰もサンドウヰス

島の一村を携へ来る者も似あり爰は居住する
者ハ氣候平穩にして身体を健康を進免且土地
豊饒ふれハ僅は筋骨を勞し飲食も乏き事なき
を以て皆依然として故國の情を起す者あり是
故に亞國人歐洲人等カナカ婦人の貞実善良な
る者を撰ひ細君に居住せり。

提督彼理氏本島は破泊する事暫時ふりこ雖務
免てペール島内の事跡を密に探索せんを欲し
けれハ一隊の人員を命し之を分て二列と爲し
其一列ハ士官バイヤルドマイロル氏を以て長

官に。其一系列ハ副外科医官「ス」氏を。長官に
し。内地に入て探索せしむ

右両氏提督の命を奉し。密に探索せんとの目的
ふれハ忽ち旅装を整へ。六月十五日早朝船中を
立出けり。カイロル氏の麾下に属する者を。同氏
と共に八名に派。即ち「バイヤルド、タイロル氏、
長ヘー子氏、傳令官「ポードマン」氏、器械補官「ラウ
レン」氏、管食官「ハムプトン」氏、海兵「スミッツ」氏、水
手「デンニス、テルリ」氏、支那人擔夫一名あり。ベ
ル島ハ叢雨多る一小島より其長は僅に六里

ふる。タイロル。ス。両氏に分れて。検査する
事ふれハ。一日より忽ち調せんと思へり本島
の北部ハ直に港口に接す。「ス」氏検査の持場
に其南部ハ「タイロル」氏検査の持場に即ち
下は速る所の如し

十五日朝日出る。スコイハンナ船を離れ小舟
を浮一港頭の汲水場まで達し上陸して諸人は食
料及び彈薬を分ち與ふ。此時偶に土着の「カナカ」人
來りし故嚮導たらん事を請ふれ共肯せし是よ
り「カナカ」人の居所までハ小徑ありて一岡を越

内程集
へ三里といへり是に於てカナカ人の教ゆる所
に倣ひ行し其路ハ滑道スリにして峻急且回飯線
中ニ生ずる草類繁茂し加之棕櫚多く其間ニ沙
穀米樹も茂り又寄生木ありて樹枝より樹枝ニ
渡り恰も綱を張たる如し此時未だ早朝なれ
ハ密林叢樹の間より落る白露密雨の降るニ異
ふらぎれハ諸人皆其水皮膚層ニ徹したり。本地の
地質ハ口ト港及以自餘の地質ニ同質にして
壇形の岩石の破裂せし者ニ草木の腐敗せし者
と相混して生せしふるへし此壇形の岩石ト云

ろハ丘陵の脆モロ性キ粗造の石大なる橙花の開き多
る如く破裂して周囲ニ黄色を帯ひ落ち来る
者ふるへし又諸所ニ高さ三十トトニ及ぶ大
樹あり白花爛熳にして既ニ満開を過ぎ地上ニ
落て白雨の残れる如き所あり
山上ニ登る道路ハ丘背にして遂ニ山頂ニ達し
其間草木叢生し又棕櫚葉大傘を開く如く大
木相接し蔓草密網を張るニ齊し日光之り為ニ
遮られ白晝も尚暗然にして二三トトの外
を洞視する事能たされハ道を誤りし事も少し

内務省

らす既ニ登りたれハ丘背の側ニ數十の小流あり其邊りニ到れハ數千の陸蟹足音ニ驚き其穴より出て奔り去る者幾千萬といふ數を知らず山上ハ縦横ニ一里若クハ半里の平面ニして波紋の如き凸凹を生シ又深き溝あり山脊の一面ニハ深き凹路ありて甚ク峻急なり之を下るハ一樹より一樹ニ傳えらるルハ下り難シ其幾々多る峻山の間の凹路ニハ諸所ニ禿岩あり其餘ハ悉ク青草叢生シ此間一條の河流を生シて岩石の上を通シ草葉を穿て丘陵の下ニ流る実

山程

ニ原野の好風景あり

ハイヤルド、タイロル氏の一系列ガロ未詳ニ稱する木の深林ある原野を過き之を越へて其後ニ出たり然るニ此路峻難ニして行ハラるを以て再ヒガロの樹林ニ飯り河流を渡りたる所ニ溪谷を隔て村落ニ赴く路ニ覺るる一道あり路傍彼此の地所ニ番薯、ガロ煙草甘蔗冬瓜、シダ一名印度産ガロニベルレ鷺鳥の覆盆子の義を植たり。其播殖實ニ驚クハ此時四方を回顧すルハ、一溪の中央ニ當リ二本の棕櫚ニて葺く小屋あり

山程

けるを以て其内に入り窺ひ見よ今朝までも
何人う住する跡ハあれと一人も其人を見ず是
に於て砲声よて土人を誘ひ出さるやと思ひ付
多れハ火を點して一發せし忽ち大音よ叫びて
出て来る者あり之を見れハ南海島住の人種よ
して其面よ薄く藍黥し其身よ粗製木綿の襦衣
と勝衣カキを着たり此一男子自らいへるを予
ハ本ママルコイザス島の内ニ「カワ」の産よして貴
き司法官ふりと。マルコイサスよてハ高貴ふる
位階よ見へあり彼れ自ら一舎を構へ耕作す

き一地を設けて犬數疋豕四足を飼ひ清潔の形
勢ふり予等ふ丁寧を盡し且彼ら部下の命して
親切の百事を告しり又自ら彼ら住む所の溪は
山稜を回り海岸の西方よ至て始て開くといへ
り司法司溪流を指していへるハ此河小流の如
しと雖其水量獨木舟を浮ふるよ足る我今一舟
に棹し緑龜を捕へ飯りし所ふりと彼れ自ら一
大龜を携へ未り之を屠りて四足の犬を呼ひ分
ち與へけれハ犬欣然多る容貌よて忽ち喰ひ盡
してけり

内務省

司法司又予等ニ向て云へりけるハ我れ能く諸君を本島南部の極所ニ案内せ見然るニ往來をへき道路なく大約其里程三四里もあるからんニ此時又司法官一漢を呼び寄たり其名をヲタヘトタニと呼ふ其顔色銅色ニ齊シ僅ニ英語を辨すヲタヘトタニ自ら南部ニ至る道を知り又能く野熊を獵すといふ然れ共司法官行き給てされハ諸君ニ共ニ行く事を欲せずニ答ふ司法官其初ハ逡巡して兼諾せざるニ過刺捕へ来りし亀肉を收め終りたらハ諸君ニ共ニ南部ニ

赴んと同意しけるを以て予等も當然の事なりと申たり

司法官ニ住む所の谷ハ其長キ洋里ニて一里其幅ハ最も廣キ所ニて一里を四分するの一ニ此谷兩三條ニ分る予等々既ニ通行したるハ其小なる者ニて其大なるハ東ニ向ひ中央ニ小河あり此谷の南部ハ岩石累々として恰も大堤を築き多る如くふれハ突ニ往來すへらす司法官ニ居宅ハ海濱より半里餘の所ニあり本地の土質ハ真土ニて土人の耕作して得る所の富

穰ふるを以て察すれハ地味極て肥腴ふるこ
見たり煙草ハ殊ニ地質ニ應りて其高さ五
トト及ふ者あり。溪水ハ甘味を帯て清潔且終
年一時も絶る事なく。司法官其帽子ニ樽
椽たきを盛り居り故何所ニて取りしやと尋しニ谷
の北ニて取多りと答ふ

司法官漸く亀肉を収めたれハ「ヲタヘ」ト氏
ノ郷導ニて凹路ニ流る。溪水ニ沼ハ東南東ニ
向ひ立出ける。備此水底ハ所謂壇石の碎片相累
り溪邊ニハ回飯線中ニ生ずる草木及び寄生木

多く茂生しけれハ樹林の稠密ふる。土質の粘
滑する。こよて実ニ脚步を進め難くて二人後れ
し者あり之を待んとて石ニ跨り居りしニ一発
の砲声聞へ。故何やらんと思ひしニ二人來り
て一足の野熊を見出し之を狙撃せしニ惜む
し中らき甲しと答ふ。土人の飼ふたの樹林ニ入
り野獸を驅逐するの功なく。唯其主人の左右ニ
のみ在るを以て山中ニ連れ行ても其用を為さ
るるあり

溪流を離れて凹路の南部ニ出けれハ其道峻急

まゝして樹根を攀ふ或は大なる蔓莖を撰ひと之
の傳ひ登りしは樹陰深く且樹根路上に横たり
人跡なき地ふれは各人皆別路に別れける唯郷
導の兩人のみ早く山頂に達して予等を待居た
り暫時まゝして各人皆登り来り相見れは其手に
疵を受し者あり是路上に棕櫚多く其間にハル
マラチナ木に唱ふる木ありて其幹ハヒト餘
其葉頗廣く葉角に刺を生し之を傷られし
かり又「バンタニ」に稱する木あり此木直幹に
して其下部より二三十の嫩芽ワカメを生して地中

入り其形金字塔に似たり其上部に圓柱の如く
長く延て上端は青々たる葉を生し美景なり
同伴の内は於て後れし者あり故山脊に止り
待居たるは比隣の溪中にて犬の吠る声頻
に聞へけれは直に兩人立向ひけり其後も尚砲
声聞へける故長官タイロル氏も砲声の地を目
的にし深き樹林を押し分け行けるは野熊の巢窟
ありて小流の所に到り見れは同伴の壯士等小
熊を捕へて囲み居れり其熊は生れてより未だ
一歳に満すして鼻長く毛色黒灰色を帯ひ甚し

不潔を極免其形状恰も支那の豚の如し此時同行のハムフトン氏獨り山脊に残りたるを以て司法官彼を迎へんとて馳せ行たりしに忽ち飯り來てハムフトン氏ハ病魔に罹て來り得ずといふ然るに同氏大に疲勞したれ共暫時よして快復し予等許りに到れりハムフトン氏快復したれ共疲勞未だ残れり故同伴皆此より飯られよと勸むヲタヘト夕に二里程を問へハ島南の極所まで僅に二里と答ふハムフトン氏之を聞て二里ふらハ我能く行人と云ふを知らハこて彼

の小熊の肝臓と臍臓とを取り其死体をハ樹枝に掛て各南部に立出ける
夫より大約半時を経て山脊を越へ南部斜地の絶頂に達す本地よりハ既ハ海水も見へ又正南よりサト西に當て遙に「バイレー」島の景色も聳つて見ゆ是より尚進み行人にするに「ヲタヘ」氏道を誤るを以て行路羊腸岩石峻急にして下ろへららす又前路に飯らんとするも岨に野草滿地に叢生し葡萄せされハ飯るへららす是故に同行皆二百ヤルトの間辛ふ

て登り漸く峻岨を過たる。又急なる下り阪あり諸氏皆阪を脊より滑り下り、益々急所に至れば蔓草を力より或ハ地の高き所に手を掛けて急に落さる様用心して下り漸く回路を達したれと未と海濱に流るる溪流なく十ピートより五十ピートの断岸ありて之を登り此難路を經きれば海邊に下り得ざるを以て同行皆大に歎嗟せり夫より或ハ先たち或ハ後れて漸く小流の側に下り其先つ下る者今尚岩稜を傳ひ峻路を下り來るを見れば我も既に彼の難路を能くこす無

内務省

難に下れりと思えれて實に身体戦慄を催したり
ヲタヘータニ氏一江を指して以へるハ之を南東江に稱す鯨獵船の屢來る所にして其來りたるを證せんとして大斧を以て一樹を切り其断痕を平にして今尚存在すは本地の河岸に於て雜草と共に蕃茄ナスの生せし者あり是れ自然生し非ず嘗て人手にて植し者あるは諸諸氏難路に悩み大に疲勞し且炎暑焼る如く是れ共皆一所に會し火を焚て今朝捕へたる小鯨の肝臓と脛臓

内務省

こを出し又携へ行ある豕肉及び其他の食料を
合せ煮て之を食ひ各臨時の盛饌ふれハ貪りて
満腹ニ至り疲労を慰し。休息しぬれハ既ニ二時
ニ至て飯路ニ赴る人ニ以此時ヲ夕ヘ一タニ前
路を経て飯らんと云し故諸氏皆亦前路の艱難
を想像し其危篤を恐怖して顔色悽然多り然る
ニ他ニ飯るへき路ふけれハ止む事を得ず前路
より飯りしれニ疲労を累ねしのみよてヲ夕ヘ
一タニ等兩氏ニ誘えれ司法官ハ居宅の山溪ニ
飯着しけり

司法官ハ許ニ飯りて時計を見れハ既ニ六時ふ
るを以て同氏ハ宅よてハ突ニ暫時休息せしめ
みよて立出けるニ同行の一人大ニ疲労して歩
行し得ざるを以て。ヲ夕ヘ一タニ氏ニ頼み獨木
舟よてロイド港の南端カ十人の佳所ニ送り
其他ハ皆今朝来りたる陸路より飯らんと立出
たより道見へすして鬱林ニ入り又雜草多
加之路上ハ凸凹ありて困めり途中よて又同伴
の一人大ニ疲れ歩行し難き故ニ山上の平地
を撰ひ一人を添て残り置きロイド港の南端カ

ナカ」に達し本港にあり岩上に坐し本船にスコ
イハンナを見れば暗夜朦朧の中あり是に於
て飯着を表せんが為小銃を連發しぬれ本
船より小舟を浮へ来りし故彼疲労の者を迎へ
同伴悉く之に打來りスコイハンナに飯りし
時ハ既に十時あり衆皆實に疲労を極免たり副
外科医官「ラス」氏も同時の飯着したり今日同
氏の経過したる途中の事跡ハ左に述る所の如
し
「ラス」氏等本島の地質を検査せしに諸所に於

て嘗て火脈の噴出したる痕跡あり其初噴火
山たゞし事疑ふべからず所謂壇状の石類ハ鐘
乳石と緑石と相混したる物にして本島の基礎
より其丘陵に至る迄悉く此石類より為る本地
の凹路は一の硫黄泉あり之を嗅ぎ其氣猛烈之
を味へハ硫酸瓦斯あり又諸所に硫鉄多し島中
に生ずる所の草木本島に同緯度の噴火地に在
る種類を見ずコイト港ハ強き噴火山の噴口お
るへし其火を噴出するに當て方今の港口ハ周
圍に丘陵を生し其側に深き溝渠を生する如

くよて其坑中より熔解して流れ出る所の物品
悉く溝渠より海中に落ち鎮火の後一湾を生
て海水に灰燼に残留し水燼も漸く枯渴して唯
珊瑚の残餘を止め港底に沈在せし者ふらん
本島の地形同一から低平地ハ丘陵の下より海
岸に達し其土質ハ黒色にして植物を培養す
き糞土に其深底ハ珊瑚にして表面ハ此糞土
貝殻石類を混し五ヒ一乃至六ヒ一に散在
し者ふり此平地甚に肥腴にして既ニ開墾
所ニ殆ど巨大なる番薯玉蜀黍ヤムス夕口
共ニ未詳

西瓜野菜類殊に頗る巨大にして良種の甘蔗を
生す嘗てアイリス名國の薯種を齎し來り之を植
へて試みし其年月未久しうらきれハ地質
に應ずるや否やを知らず江口の平地ハ開墾
し所未甚た些少なれ共他所の肥腴なるを以
て察をるに江口も亦肥地にして之を開るハ
人数糊口をへき物品を生せざるの理なる
本島の丘陵ハ平地より漸次に登る者あり又俄
然として急に登る者あり其俄然として登る者

内務省

内務省

ハ一の臺上又は一臺を重ねたる如く江頭に
屹立して相對したる兩峯あり之を乳頭山と稱
す其一山ハ一千七百一十一其一山ハ一千七百一十一
こいふ此兩峯遙く海上より港口に當て見え
も航海客の港口を示す如くふれハ実の航海
の要峯なり石一匹の検査したる北部半島に
ハ湧水少くして唯二泉のみふれ共清浄なる飲
水常に絶る時ふし此二泉の外溪中諸所に湧泉
あり共塩氣を帯ひ且乾枯するを以て頼むべ
らに雨候は溪間の凹路に數條の小河を生じ

海中に流れ共河底岩石ふれハ晴候に至れば僅
に水氣あるのみあり
草木の種類ハ回飯線中に生ずる草木にして本
島と同緯度の地位に生ずる者の如く青々とし
て暢茂せり溪中及び海渚に一種の大木多し土
人之をクリメノト唱ふ此木の幹ハ大にして短
く灰色の皮あり其葉ハ密にして枝の周圍に叢
生し其葉は状を楕圓にして緑色を帯ひ表面平
滑なり其花ハ枝端に開きて白色あり
棕櫚ハ丘陵より左右の溪中に至る迄鬱々とし

内務省

内務省

て繁茂いけれハ其本体を見定々難き程にて他
 樹之り為ニ壓せらま成長し難き者あり島中ニ
 生ずる棕櫚六種あり就中「バンパルム」ニ稱する
 棕櫚最も多し又木種の内ニ於て頗る巨大なる
 山毛榉マツノキの一種あり又「ドクウ」ドクウの大木ニ類似し
 多し一種の大木多し山上ニ見ゆ桑樹ハ殊ニ多
 分よりて其周囲十三ピトより十四ピトニ
 及ぶ者少しらす矮小なる草木の類ハ桂樹杜松
 柘植シロハナ萩ハナ橙鳳梨コケモ越橘コケモニ似たり左スモセスニ共
 苔コケの義 及ひ寄生木の種類甚多し野草の種類
 未詳

極めて少し偶々多く生ずる者あれ共牧畜の食料ニ
 供ハ難し又未だ開墾せざる地ニ生したる一種
 の野草あり此草漫りニ繁茂して他草を生せし
 りん
 島中ニ數種の獸類を放ち多し共雜草の内ニ卧
 し大樹の間ニ往來せしを以て悉く野生の獸類
 ニ化し多し鳥類ハ鳩。鶯。鳥。サ。ン。ド。バ。イ。プ。ル。ス。未
 來住し又亀。大蜥蜴。小蜥蜴多し是れ島中從來の
 者ふるへし
 右ニ述る如くペール島ハ既ニ西氏ニ命じて檢

査せしめ多るを以て提督彼理氏又士官某氏を
招き「スダプレート」島の地質地形及び其要件を
検査せしめんといふ「スダプレート」島も亦其初噴
火山よりして平地丘陵溪谷あれ共開墾すべき地
位少き非ず本島の西部より小江あり海水意
外より浅し其周囲より八十ピートより一千五百ピ
ートの高山岩石直立し以て本港の南東より來
る大風を防ぐ屏障と為る者の如し
本江ハ小岬と珊瑚石とより其周囲を繞らし北
部と接する所の岩間より清涼よりして美味なる

戸程

一 泉を生ず其水量一分時間三ガロン一
ニ 升ハ大約我を出すといふ「スダプレート」島の産
物も「ペール」諸島と異なる所あり唯山羊大に播
殖して数千足あり及ひ多れ共峻山を越へ絶壁を
渡り其生路を営み來るを以て性質悉く野獸と變り多し
彼理氏從來亞國交易の爲に自ら無人
諸島の地形及び其要件を検査せんとするの爲
望ありし今「ペール」島を撰んで後日かりホル
ニヤと支那との間を往來する蒸氣船の碇泊所
とせんといふ是故に彼理氏地形を検査し港内を

内務省

探索し又後日の食料と為んう為べしルスガ
 レトニ二島ニ數足の獸類を放ちたゞ彼理氏又
 土人ニ野菜穀類の種子を與へ且後日用ふべき
 農具及ハ獸類を放ちし所以をも土人ニ申聞せ
 たゞ此外同民政廳埠頭石炭庫蒸氣船會所を設
 くべき地所をも撰ひ之を本國の私有と以其地
 位ハ江頭の北部より其長さ千ヤルドの海水
 面一訖中五百ヤルドハ海濱ニ接して深き所
 を撰ひ海中五十ヤルドの所ニ避波を設け以て
 大船の碇泊するに備ふ

提督彼理氏右の如く検査せしを以て亞國蒸氣
 船碇泊所ハハル島適應の地多らん事を一書
 し記し之を本國の海軍局ニ達す其文ニ曰く
 拙者常ニ太平洋海中を往復する船舶の碇泊所ニ
 集會所を檢出し定免んニ希望いたし居候間
 此行の初より琉球港ニ無人島中の良港を撰
 ひ碇泊所として恰も連環の相連り驛程の相続
 くの如く一以て飛脚蒸氣船往來する線路の休
 泊に備へ度候今太平洋海中亞國ニ屬する海港ニ
 支那の海港ニ蒸氣船の往來出來せハ此盛代

の歴史より稱譽する所にて亞國并に世界萬國
 交易の為に至要至切の良港に可有之存候
 合衆國に歐羅巴にの飛脚船ハエゲイボト紅海
 印度海を経て一月中二週毎に日數を違へ必
 ず香港に達し申候香港より上海までハ五日の
 海路に有之候上海よりカリホルニアまで合衆
 國にて船を出し候ハ、上海より歐洲迄の海路
 ハ英國にて船を造り必に出し可申候
 蒸氣船にて上海を出帆し無人島サントウ諸
 島を経てサンフランシスコに達するに薪水等

の為碇泊するを三日に定免三十日にて来着可
 致候是故にサンフランシスコよりサントウ諸
 島中ホノルルまでの里數大約二千九十三里ホ
 ノルルよりペール島まで三千三百の一里ヘ
 ル島より上海河口ヤン、ツ、ケンまで千零八十
 一里總計六千四百七十五里有之候一日に二百
 四十里程にして海上二十七日碇泊三日に定む
 又サンフランシスコよりニューヨークまで二十
 二日程ふれハ上海よりニューヨーク迄總日數五
 十二日にして着し可申候

英國より經路ヲマルセルスヲを経て香港ニ到る
よハ其日數四十五日乃至四十八日ニ相成候此
日數ニ香港碇泊二日上海碇泊五日を加へ候
ハ五十二日より五十五日ニて上海ニ到着可致
候

上海を英國蒸氣船の往來する極所ニ定免又亞
國蒸氣船の往來をシ始ニ定免申候右故英國船
の持飯ヲ書簡ハ之を西ニ送てリタルポルニ
達シ亞國船の持飯ヲ書簡ハ之を東ニ送てカリ
ホルニヤ違シ其日數大約同日ニ可有之候

右の船路を備へ交易の便利を得候ハ、貨財を
得の利を論せハ拙者世ニ至要ナル策畧せりト
名譽を可得候又既ニ數十年來支那人ガリホル
ニア渡來致シ候者其船中薪水を除くの外自
費ニて諸品を備へ一人前五十弗宛ニ有之候
支那人ハ質朴ニて能く使役ニ堪る性あるを
以てカリホルニアて農業ニ從事せシ免度候
上海ハ方今支那の大交易場ニ相成殊ニ合衆國
ニ交易を開きシ以來ハ關東ニ由越申候保シ同
國の産物上茶絹絲其外高價ナル奇物を蒸氣船

ニ出シ五週にてカリホルニアに送り八週にて
ニューヨークに送り候様迅速に致し候ても其利
益ありや否や先見致し難く候

亜國にて東海に交易を開かんと欲せし無人
島ハ實に至要なる地にして其證を彼理氏
國に至ても尚心中に止め此書の草稿を終り
て後左の追記を編輯家に授け加入せしめし
ふり

無人島追記

予嘗て以為らく無人島ハ太平洋海中を往返す

る船舶の碇泊所無二の適地ふりに又以為
らく太平洋海中無人島近海に赴く鯨漁船の薪
水及び食料を求むるの妙地加之カリホルニ
アより日本を経て支那に航海する船舶の石
炭を貯藏するに無二の地位ふりに是故に予
此行に於て無人島に到らざる事を得を望し
ふり

無人島に亞細亞海との間に於て鯨魚多く殊
に日本近海に多し帝國日本に獨立の國とし
て他國に交通せざる國風なれし其手に陥り

或ハ幽囚或ハ慘刺の所置を受人事を恐れ鯨
獵船も敢て其海濱に近づく者なく然るに今
日に至てハ既に日本に條約を結ひ盟文あり
又不幸よりて日本海岸に漂着する亞船又猛
風の為に破損し其修復を加へんとて入港す
る亞船ハ親意を以て待遇せんといへる保證
あれハ衆皆更に恐怖する事なく箱館下田
両港も船舶修復薪水給與の為に既に開港す
り

前條に示す如くなるを以て亞國の鯨獵船

後來ハ日本海殊に東海に於て何の障碍なく
安全に其海濱に入港すべし然れ共我々鯨獵
船を日本の港内に其國法の制禁なく又其國
民の妨障なく安全自由に出入せしめ難き所
あり是れ一の缺典に既に條約存に日本に
於て箱館港下田港琉球に於て那霸港を開く
に雖皆從來鎖國なるを以て土人外國人を見
て或ハ惡み或ハ嫉むの風習急に脱し難く又
鯨獵船の水夫も粗暴過激なる故に實に急
速相親和して交通し難なるべし是れ予々無

人島を開くの議論を主張する所以なり予う
見を以てたれハ本島の何事の管轄に属する
やを論せし左に示す如く無人島中の大島に
一港に植民するを良策に以予既に此紀行
に於て詳に本島の事跡を述へ今又加ふるに
人民を植へ家屋を建る事を以てす若し予う
此策を施さハ後來其植民全島に播殖すへ
若し予う策に決定する時ハ先づ数名の工匠
に相謀り又同社を結ひ貯金を設けべし島
に植民すへしされに其入費も恐くハ多量に

ハ至らざらん先づ三四百噸の船二艘を作り
鯨獵の用意を為し倉庫住舎を作らへき木材
を積み送り又雜貨^{雑貨}鋪^{モト}海軍需用品其他鯨獵船
商船に要用ふる諸品を備ふるに缺へらざる
る要具を送り此船に一島に到着せし植民
に荷物にを揚げ日本海及び其近海にて鯨魚
を獵し時々本島に到るへし此二艘にて得る
所の鯨油既に一艘に積むべき量に満たらハ
一艘ハ其鯨油を本國に輸送し復新に植民を
載せ且島中にて切要なる物品を積み来り二

艘にて新陳交代す一右の如く此ハ殖民も
久しうらすして播殖し且此事件ハ関係し多
る同社も裨益を得るよ至らん此時よ至らん
亞國英國佛國の鯨獵船べし島よ輻輳して
來佳の商家よてハ船中必用の諸品を求め農
家よてハ野菜を求め工匠の家よてハ修復を
頼まん若し其代料なき時ハ右の船中よ貯ふ
る鯨油を取るへし
○其初本島よ到りし殖民新よ別宅を構へて
産業を営むよ至る迄ハ跡より到る者ハ新嫁

の者よて先居の者よ同居す一き者の外ハ漫
りよ到る事を許さば斯く同居せしむる時ハ
同教相親み洪福相共よして異論なく又故障
なく我り教法を傳ふる基本を起す一是よ
於て傳教師を招き日本臺灣其他近隣未開の
諸國よ遣すへし○方今サードウズ諸島より
日本海よて鯨獵する船舶近隣よ到るへき海
港なきを以て止む事を得ず其漁獵する地よ
り數千里を隔て或ハサードウズ島よ到り或
ハ香港よ到て其要品を求め又無益の金貨を

失ふ金主ハ之ヲ為シ大ニ散財シ水夫ハ疾病
を生シ且放蕩懶惰ニ陥リ頗ル風儀を破るニ
至ル今ベール島を開キ碇泊所ニ為シハ鯨獵
地所ノ中央ふるを以て往來ノ雜費を省キ且
水夫等も數年間ハ耽淫ノ地ニ遠ク放蕩ノ
術を失ふハ○無人島を其始て檢出セハ
日本人ふるを以て之を管轄する權威ハ實ニ
日本ニ屬ス日本より希望するノ外ハ本島を
管轄するノ權威必ス先ツ殖民する者ニ在リ
無人島ニ四日碇泊して望スヨイハンナサラト

ガの両船六月十八日早朝出帆して再ハ琉球ニ
赴かんニ其艤装をそ調へける

小笠原島紀事全部三十二卷稿成第一ノ卷頗ル
數紙繙閱ニ不便ナラン事ヲ恐レ割テ乾坤二卷
トナシ且第十九ノ卷ヨリ同二十一ノ卷ニ至ル
ノ三卷ハ則真景圖ニシテ共ニ總計三十三卷淨
書ノ交名如左

寫字生 岩本政 亘

同 片山謙 一

同 相良格次郎

同 市川 昂

試驗寫字 上野月下

門
積
雀

同 安達延世

同 市川 渙

同 高田英策

同 中村精造

画圖

外務權少録 河野雪巖

寫字生 中島政信

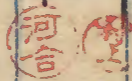
同 市川 昂

維時明治七年三月十八日

明治十五年九月

校合

村上 一幹
河合 光雄



内
雅
雀

吉
政
官
庫

文
庫
同
庫

即
或
十
五
年
六
月

林
合
林
合
光
建

